地盤工学会関西支部　第１５回若手セミナー

主催：（公社）地盤工学会関西支部
協賛：（公社）土木学会関西支部
（一社）建設コンサルタンツ協会近畿支部
（一社）日本建築学会近畿支部,（公社）大阪府建築士会
（一社）関西地質調査業協会

地盤工学会関西支部では、学会次世代を担う若手会員の「活性化」・「交流」を目的として 9 年前より若手セミナーを計 14 回開催して参りました。今年度も、若手技術者の「基礎知識の習得」・「技術継承」・「人脈形成」の場となることを期待し、次のとおりセミナーを開催いたします。

第 15 回は昨年に引き続き、シニア世代土木技術者のボランティア組織である CVV（Civil Veterans & Volunteers）で活動されている 2 名の方をお招きし、これまでの業務等で得られた経験や知見についてご講演いただきます。また、意見交換の場では、皆様が日頃業務に携われているなかで抱えられている疑問やお悩み等についてお寄せいただき、情報共有を図ることで幅広い視点からの意見による解決への一助となれば幸いです。セミナー後には同会場にて交流会も予定しています。講演中にはなかなか聞くことのできないようなお話も、少しリラックスした雰囲気で聞いてみませんか？また会場参加の皆様ともより深く交流が図れるかと思いますので、是非、会場参加をご検討ください。

本セミナーは、若手技術者の継続的な交流を目指しています。官公庁や自治体、企業に勤める若手技術者や研究者の方、学生の方、奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

（1）日　　時：令和 6 年 11 月 22 日（金）　14:00～16:30 (交流会は 18:00 まで)
（2）場　　所：ドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター）大会議室 2（5F）
（3）定　　員：会場 50 名＋Zoom ミーティング（オンラインとのハイブリッド開催）
※20～30 代の若手を主な対象としていますが、どなたでもご参加いただけます。
（4）参 加 料(税込み)：会員 2,200 円、会員（若手）0 円、
非会員 4,400 円、非会員（学生）1,100 円
交流会の参加料：会員・非会員 1,100 円、若手・学生 0 円
※特別会員に入会企業の方は、非会員でも会員価格でご参加いただけます。
人数の上限については地盤工学会 HP（https://www.jiban.or.jp/）をご確認ください（公益社団法人地盤工学会 ＞ 入会案内 ＞ 会員の特典）。
※協賛団体の会員は会員価格です。
（5）内　　容：13:30　会場受付開始
14:00　開会挨拶
14:10　講演「ブータンの橋梁・道路事情および地盤に関する諸事情について」
講師　鈴木　威　氏
（ショーボンド建設株式会社、元 阪神高速道路株式会社）
・橋梁下部工の洗堀問題
・道路のり面の崩壊状況
・ブータンヒマラヤにおける氷河および氷河湖の状況　など
14:55　質疑応答・意見交換

15:10　休憩

15:20　講演「精神的ストレスへの対処について

ーストレスフルの時代を生き抜く皆さんへー」

講師　古川　博一氏（元 国土交通省）

ストレスフルの時代を生き抜く皆さんに対し、過去精神的に厳しかった時を振り返りストレスを軽減する一助をお伝えします

・イラクからのミサイル攻撃下のイランでの生活

・ダム建設を原則認めない第一期淀川流域委員会（～平成２１年８月）

・実践してきた、個人的な危機管理方策について　など

16:05　質疑応答・意見交換

16:20　閉会挨拶

16:30　交流会

18:00　終了

※講演内容要旨は会場にて配布もしくはE-mailで参加者に事前に送ります。

(6) G-CPDポイント：2.0

(7) 申込み期限：令和6年11月15日（金）

(8) 申込み方法：

(公社)地盤工学会関西支部ホームページ右欄の「行事申込」タブよりお申込みください。

http://www.jgskb.jp/list_form/

E-mailまたはFAXで、①氏名、②所属、③所属住所、④所属先電話番号･FAX･メールアドレス、⑤会員･非会員の別、⑥生年月日をご記入の上、お送りいただいても申込みできます。

申込受付後、ZOOMにて参加される方にはZOOMミーティングID･パスコードをE-mailでお知らせします。また、登録住所へ請求書を郵送いたします。

(9) 申 込 み 先：(公社) 地盤工学会関西支部

〒540-0012 大阪市中央区谷町1-5-7 ストークビル天満橋801 号

TEL：06-6946-0393　　FAX：06-6946-0383

E-mail：office@jgskb.jp URL：http://www.jgskb.jp

前回（昨年）の若手セミナーの様子

前回は、大半の方が対面にて参加され、講演・交流会共に大変活気のある雰囲気でとり行われました。

講義聴講の様子

交流会の様子

同年代の同業・異業者との交流が深まります。

地盤工学会関西支部　第１５回若手セミナー　講演内容

2024.11.22（金）　ドーンセンター大会議室２（5F）

講演①　14:10～15:10

「ブータンの橋梁・道路事情および地盤に関する諸事情について」

講師 ： 鈴木 威(ショーボンド建設株式会社、元 阪神高速道路株式会社)

ブータン王国は，アルプス･ヒマラヤ造山帯のヒマラヤ山脈の東部に位置し，総面積が 38, 398 平方キロメートル，南側をインド，北側を中国に挟まれた小国である。ブータンでは道路が主要な交通・輸送手段であり，効率的で安全な道路網整備が社会・経済の発展に不可欠であるため，国家開発大綱「ブータン 2020(1999)」や「道路セクターマスタープラン(2006)」で道路網整備を国家開発の軸と位置づけて道路開発を強く推進している。しかしながら，国土の大部分が険しい山岳地帯であるうえに道路インフラの整備状況は脆弱で橋梁の流失や斜面崩壊などにより人の移動や物資の輸送に大きな支障をきたしているのが現状である。さらに、ヒマラヤ特有の大氷河を抱えることから氷河湖決壊洪水も問題視されている。

今回のセミナーでは 1998 年から 2 年間のブータンにおける JICA 橋梁専門家としての経験や 2018 年から 2022 年にかけての「橋梁維持管理能力向上プロジェクト」への参画、2012 年のブータン英字新聞（KUENSEL）ウェブ版記事特集等をもとに、「ブータン概観」、「橋梁維持管理上の問題点とその対応状況」、「道路のり面の崩壊とその対応状況」、「氷河湖決壊洪水の発生事例とその対応状況」に関して紹介します。セミナーを通じてブータンにおける自然条件の厳しさを理解していただければと考えています。

講演②　15:20～16:20

「精神的ストレスへの対処について －ストレスフルの時代を生き抜く皆さんへ－」

講師 ： 古川 博一(元 国土交通省)

大阪市で生まれ、1979 年 4 月に建設省に入り 11 年 7 月に国土交通省を退職するまで 32 年間 14 カ所で勤務しました。その後は 11 年 10 月から 23 年 3 月までいであ（株）に勤務しました。CVV には 23 年 3 月から加入しています。地盤工学に関わる経験は断片的でしかないため、仕事を続ける中で経験したストレスとその対処法について、お伝えすることで若手の皆さんへの助言とさせていただきます。

1 つ目は 87 年 3 月、外務省に出向し、在イラン大使館に勤務していた時のことです。当時イラン・イラク紛争中で、相互都市攻撃という状況でイラク側からテヘランに約 200 発のミサイルが撃ち込まれました。この時の経験と精神的ストレスを解消するために行った運動、当時の大使館での仕事やテヘランでの生活などを含めて紹介します。

2 つ目は 02 年 4 月、水資源開発公団（現水資源機構）関西支社副支社長として前任地の岡山から大阪に戻ってきたときのことです。家族も東京から大阪へ戻ってきました。ふるさと大阪で家族と生活でき、恵まれたはずが苦しい時代となりました。

97 年の河川法改正で河川整備の計画制度が変わり、「河川整備計画」について学識経験者から意見と聞く場として淀川水系流域委員会が 01 年にスタートしていました。ここでは河川管理者から提示された原案について審議するのでなく、委員自らが多くの会議で議論し、淀川水系における河川の整備にあたっての視点、考え方、方向性などを河川管理者に示す方法で進められていました。私が着任後すぐの 02 年 5 月に「中間とりまとめ」が出され、更に議論をされ 03 年 1 月に「提言」が出されました。ダム建設に関して厳しい内容であり、流域委員会の会合に出席するたびに強いストレスを感じ、提言発表会終了時には憂鬱な気分でした。

しかし、その晩、高校時代の仲間との会合があり、懐かしい友と「おお笑い」したことで憂鬱な気分が吹き飛びました。帰った家で家内に「我が家に笑いがない」と言うと、逆に「仕事から帰ってくるあなたの顔が怖い」と言い返されました。このため、支社からの帰り路に天神橋筋商店街を歩いたり、梅田のデパ地下を覗いたりして、土産を買って笑顔で帰ることなど、自分を取り戻せたと思います。

仕事の方も 03 年 4 月からは支社長となり、10 月の水資源開発公団から水資源機構への組織改編に向けて内部や関係機関への説明など流域委員会以外の仕事が中心となり、ストレスも軽減しました。

民間も含め 40 年以上、仕事を続ける中で、自分なりに自律神経を整える方法について試みてきましたのでそれも最後に紹介します。